

<テープ機関誌> 月刊「ザ・ボイスメール」1月号

「福祉文化研究会」（目の不自由な方を支援するボランティア団体）への原稿

2007年12月 テープ収録・発送

「東京のドン・キホーテ」

旅行作家 清水武

筆者略歴

1941年、長野県生まれ。NHK 学園高校の教諭を経て、新聞記者に。海外特派員としてラテンアメリカ、ヨーロッパの32カ国を取材。現在、日本ペンクラブ会員、日本アビリティ協会会員。作家、英会話・スペイン語会話講師など、多彩な活躍を展開されています。

現在、定年7年目になる私は、2年前から、定年後のライフワークとして、世界文学紀行「名作の舞台を訪ねて」の執筆を始めました。

最初に取り組んだのは、セルバンテスの「ドン・キホーテ」でした。ちょうど一昨年の10月、スペインでは出版400周年の記念行事が各地で開催されていたからです。

なぜ、私が「ドン・キホーテ」に惹かれるのか——それは今から半世紀以上も前のこと、小学校の6年のときまでさかのぼります。

学校の学芸会に、クラスで「ドン・キホーテ」の劇を演ずることになり、私がドン・キホーテの従者サンチョ・パンサを演じたのがきっかけになったのです。以来、その奇想天外な物語に魅せられて少年版の本を、大人になってからは翻訳物の全巻を何回も通読したものでした。またスペイン語がわかるようになると、今度は専門の先生について原書の一部にも取り組んだのです。さらに松本幸四郎がドン・キホーテを演ずるミュージカル「ラ・マンチャの男」の舞台を3回も見に出かけたものでした。かなりの凝り性だったとも言えるでしょうね。

ドン・キホーテもですが、サンチョ・パンサの言葉もいいですね。人生の真実が含まれています。

「人間、寝てえるうちは、身分の高え者も低い者も、貧乏人も金持ちもみんな同じでさ」

「この世を捨てて、地の下へもぐる段になったら、お大名も日雇いもおんなじように窮屈な途を歩くだし、法王様のからだも寺男のからだも、よしんば背たけにちがいがあろうと、占める広さに変わりはない」（永田寛定訳）

ミュージカルのなかでドン・キホーテは訴えます。

「人生自体が狂気じみているとしたら、一体本当の狂気とは何だ本当の狂気とは。夢に溺れて現実を見ないのも狂気かも知れぬ。現実のみを追って夢を持たぬのも狂気だ。だが一番憎むべき狂気とは、あるがままの人生に折り合いをつけて、あるべき姿のために戦わないことだ」——（「ラ・マンチャの男」＝森岩雄・高田蓉子訳＝より）……

二人の間でやりとりされる会話や諺は、実に示唆に富んでいます。正義を求め悪と戦うために槍を抱え、馬に乗り、風車に向かって突進するドン・キホーテは理想主義の典型であり、その従者サンチョ・パンサは物質主義の権化とも言われています。

セルバンテスは 58 歳のとき正編を、68 歳のときに続編を出版しました。亡くなったのは奇しくもシェクスピアと同じ 1616 年でした。作品は近代西洋文学の原点ともなり、聖書について世界で多くの言語に翻訳されています。物語はわかりやすく面白い。しかしながら、それをどの程度深く理解できるかは、読者の成熟の度合いにかかわっている、とも言われています。

強きをくじき、弱きを助け「見果てぬ夢」を追いかけていく——そのドン・キホーテの生き方に魅せられて、私も定年になると自らを「東京のドン・キホーテ」として勝手に名乗り、世界文学紀行「名作の舞台を訪ねて」とのタイトルのもと“見果てぬ夢”に向かって各国への旅を開始した次第です。

物語の中のドン・キホーテは槍を掲げ、愛馬ロシナンテに乗っていますが、現在の「東京のドン・キホーテ」は、パソコンとカメラをひっさげ、飛行機に乗っての世界漫遊を続けているところです。

昨年は出版 70 周年となった「風と共に去りぬ」の舞台の取材でアメリカのアトランタとニューオーリンズを訪ねました。本年 11 月には、「名作の舞台を訪ねて」の番外編「名曲の舞台を訪ねて」として、「ある恋の物語」が誕生した、またかつて 10 年間駐在したパナマに行ってきました。

これから順次、訪れた先々で直面した感動的な出会い、旅の途上で遭遇した面白いエピソードの数々を紹介してまいる所存です。皆様が何かをお感じになり、楽しんでいただければ私としてもこんなうれしいことはございません。

それでは次回をお楽しみに。面白いお話しができるようにこれからネタを揃えてまいりますね。